

第一章 サクラ散りて……

2023/1/11 追加・修正 by OHYABU

(一)

地球は安らかに、そこにある。
そんな形容詞が戻ってきていた。
しかし――

(ああ……ここもきれいだ)

地球の季節でいえば、春。

薄いピンクと、遠く澄んだ青が、モザイクのように入り乱れ、天をおおいつくす。
時おり隙間から、きらめく光が放たれる。

満開のサクラ。連なる木々。

時間と呼吸が止まりそうになる衝撃で、歩道に立ちつくし、ひとり空を見上げている青年がいた。

名はピーター・ヨハンセン。十七歳。身長は一七五センチほど？ 中肉だが肩幅は広い。
黒い短髪。ひきしまった眉の下には、少し灰色がかった黒い瞳。

長袖のシャツの上には、青いデニムのつなぎ服。

端麗な顔だちをした、ごく一般的な地球人の若者に見えた。

――ここは、ユーラシア大陸を五分割した行政区のひとつ、東ユーラシア区。

ピーターは、今自分が立つ地には、かつてはロシアとか中国とかいった国があったという
ことを、知識としては知っていた。

多くの犠牲の上に咲く花。その美しさ……。

(……と、いけない！)

ピーターはハッと現実に戻り、警戒するかののように、大きくまわりを見わたした。

あたりは、私邸が連なる閑静な住宅地。その中を貫く、空色塗装の幹線道路。飛行状態
にある車が、真ん中の車線をはさんでまばらに走っていた。

サクラ並木は、その幹線道路の両端の歩道の上に、延々と連なっていた。

サクラはすべてソメイヨシノ。へ逸失の日々に生息地が軒並み水没し、絶滅状態に追い込
まれた品種だという。のちにこの樹が咲かせる花の美しさに魅了されていた人々が、わず
かに生き残った木々から根気よく挿し木を増やし、世界各地に植林したのだ。

いまや地球復活のシンボルと化した花。

今満開。ただそれだけに、雨でも降ると確実に花は散る。

天気予報では雷雨注意報が出ていた。予報が当たる前に、名残の花をしつかりと心に刻
み込ませたい。

しかし――今はそういうわけにはいかない。

(母さんをひとりにはしておけない……)

不安を隠しきれずに唇をかみ、惜しむように天の花々から目を離し、ピーターは足早に歩きはじめた。

歩道では、満開の花を愛でるように、大勢の人々が先ほどのピーターと同じように天を見やっていた。

ピーターは、そんな隣人たちの間を、いつものようにできるだけ気づかれずに歩いていった。

彼が知る隣人のほとんどは、目を合わせると愛想よく挨拶をしてくれるが、なかにはそっぽを向く者たちもいる。

彼の両こめかみにある十字のマーク。地球人とは異なる人類の血を引くあかし。

それをいぶかしく思う人間が、自分のまわりに常に一定数いることには、物心ついた頃から気づいていた。

ピーターは、地球人とピネロン人との間に生まれた星間ハーフの第一号だ。

ちなみに「ピネロン人」とは、「ピネロン星」に住む人類のことであり、同時に「ピネロン国」の国民のことでもある。(「地球」「ピネロン星」は惑星名。「地球国」「ピネロン国」は現在のそれぞれの国家体制、「地球人」「ピネロン人」はそれぞれに住む人類の総称であり、国民の呼称となる。)

ピーターは、母親のマリアがピネロン人。現在のピネロン国政府を支えていた官僚(故人)の孫で、彼女自身は、かつては地球でいうところの女優だった。父親のロバート・ヨハンセンは、地球国が誇る優秀なパイロットで、ワームホームを通ってピネロン星に初めて直に到着した実績をもっていた。

二人は、二つの星の間で初めて正式な婚姻関係を結び、ピーターを生んだ。このことをきっかけに、直接交流が一般民衆の間にも一気に広まった。ピネロン星からは地球への移住が相次ぎ、彼と同じようなミックスルーツの子供たちが大勢誕生していった。

しかしピーター自身は、ピネロン星にルーツを感じることはほとんどなかった。地球で生まれ育ち、母の親族とはなぜか母の弟以外とはほとんど交流がなく、ピネロン星に行ったことすら一度もなかった。

母マリアが故郷のこと、なによりも自分の祖父や父母や兄のことを、なぜかあまり語らなかつたことも影響していた。彼女が息子に教えたことといえば、一種類しかないピネロン語の基本文法や、一般的な風習、演劇に関することぐらい。彼女自身、子供の頃から地球の文化に慣れ親しんできたこともあってか、地球に住むことにさほど違和感を感じていないようにすら見えた。

彼女が息子に望んだ教育も、ふつうの地球人と同じものだった。

自宅でのリモート学習も可能であったが、ふつうに学校に通い、ふつうに地球人の友人をつくってくれることを望んだ。

——ただ、その願いどおりにはいかなかったかもしれない。ピーターにとって親しい友人はごくわずかだった。

その友人の誘いも断り、ここ最近では学校が終わるとすぐに自宅に帰る日々だった。

今日もいつものように自宅へと急いだ。
自分たち家族の周辺に不穏な動きを感じていたからだだった。

最近まで頻繁に報道されていた——ピネロン星からの移民の増大が原因と思われる事件、彼らに対する排斥運動、地球固有の文化や宗教を基とした原理主義的な復古活動など。対しピネロン星では、地球から送られてきた動植物が病原菌をバラまくとかで、大騒ぎとなっていた。動物が殺されたり、植物が焼かれたりへし折られたり、あるいはそれに関連した傷害事件も起こり、地球でも大きくとりあげられた。

ほかにも、小競り合いともいえるさまざま事件や事故が起きていた。そんななか、地球の経済を支配する巨大組織・リース財閥が、ピネロン星での事業の一部から撤退させられるかもしれないといったニュースも飛び込んできていた。

しかし一週間ほど前から、そうした報道はいきなり、ピタッと、いつさいなくなってしまうった。

代わりに、まるでパニックを抑えるかのように、音楽がひんぱんに流された。まるで愛国心や団結心を高めるかのように、地球国や地球人をほめたたえるような報道や番組がさかんに流された。

ちょうどその頃だった、自宅のガラスが割られたのは——
石が投げ込まれていたのだ。

父ロバートがピネロン星への輸送任務で不在中でのことだった。危険を感じたピーターは、しばらく学校を休むと告げたが、マリアが拒否。それならと彼女に、しばらく自宅待機するよう頼んだ。買い物などは、自分が帰ってから一緒に行くようにと。

ロバートからの連絡が途切れたのも、その頃だった。

仕事から、連絡が途切れることは珍しくはなかったものの、今回ばかりは胸騒ぎが。

(父さんはあの時何が言いたかったのか……)

出発を前にしての、ロバートから告げられた話が、あまりにも深刻で遺言めいていたからだ。

(！)

頬に冷たいものが走った。雨粒だ。

空を見上げると、さつきまで晴れていた空が一気にかげつてきていた。

予報通りとはいえ、あまりにも急変すぎる。

激しい不安にかられ、並木道を走った。

やがて右に折れる道が見えてきた。先には丘が見える。彼の家はその丘の上に建っていた。

サクラ並木は、幹線道路から分岐する形で、丘の上まで続いていた。

花は、急激な風に揺らめきはじめる。

(ん?)

背後からの車のサイレン音に気づいた。しかも何重にも響いてくる。けたたましすぎる。振り返ると、相当な数の車が進んでいた。

それらのほとんどは、幹線道路をそのまま先に進んでいったが、うち数台は、ピーターの手前で右折した。

幹線道路から外れると、道路の色は濃い藍色に。そのとたんに、車はドスンと地面に降りた。

そしてそのまま、丘を駆け上がっていくではないか！

(母さん！)

ピーターは全力で坂を駆け上がっていった。

(一)

「何をするんです！」

母マリアの絶叫が響いていた。

ピーターが息を切らして自宅にたどり着いた時には、彼女は玄関先に連れ出されていた。自宅のまわりにもサクラは植えられていた。幼い頃、マリアと一緒に植えた木々だ。

日当たりの良さからか、すでにハラハラ散りはじめていた。その中で母たちがうごめいている。

自宅の前に止まっている車は、昔「警察」という名で呼ばれていた「治安部」のものではなく、軍隊、つまり「軍事部」のものであることがわかった。——彼はそういうものは幼い頃から敏感だった。

「母さん！」

屈強な軍人が、きゃしゃなマリアの体をとり押さえていた。

色薄い肌に、緑がかった灰色の瞳のマリア。

見かけは四十に近い地球人女性に見えるが、とがった耳とピネロンマークが、純血のピネロン人であることを示していた。

家で翻訳の仕事をしていたのだろう、この時期にしては厚めの服を着たままで、連れ出されていた。

桜の花の散りゆく中での母の苦悶の顔は、別次元のもののように美しく……。

……いけない、何考えてる！

「離せ！」

ピーターは飛び込んだ。

そのとたん、視界が消えた。

「ピーター！」

マリアの絶叫が響いたが、ピーターは自分に何が起きたのかすぐにはわからなかった。真っ先に飛び込んできたのは、灰色の空。

足を引っかけられ、地面に叩きつけられていたのだ。

「息子になにをするんです！やめて……やめてください！」

「ピアター！」
「母さん！」

マリアをはがいじめにした男たちに飛びかかそうとすると、彼らとは別の男が横から飛び出し、ピアターの前に立ちはだかった。

鋭い眼光。細い顔に高い鼻に薄い唇。異様な圧迫感。

まだ若い、軍服からは、ある程度地位の高い軍人だとわかった。

ピアターは一瞬ひるんだ。この人は知らない。しかしこの顔にはどこか見覚えがある。

「少尉！息子は？」

マリアを押さえている男の一人が、ピアターを指さし言った。

少尉と呼ばれた男は首を横に振り、

「混血児は対象外だと、上からの命令だ」

冷たく、感情の乱れがない、抑揚のない低い声だった。

ピアターは、この男がこの事態の責任者で、自分を地面に叩きつけたのだと察した。

男を下からにらみつけ、

「母さんをどこへ連れて行くんだ！」

しかし答えはない。

「なんでこんなことを……」

答えはない。

「なんでこんなことを！」

「……ピネロン人だからだ」ようやく抑揚のない声で、早口でつぶやいた。

「……え？」

「ピネロン人だからだ！」

なにを言っているのか？

「戦争がはじまった。ピネロン人は収容する」

……意味がわからない。

「母さんをどこへ連れてく？！殺す気か！」

「なにを聞いてた？！収容するだけだ！」

ピアターはハツとなる。

「父に何かあったのか！」

「ロバート・ヨハンセンは死んだ！いずれ正式に発表がある！」

「！」

遠くから、マリアのつんざくような絶叫が響いた。

しかしそれも、ボタンというドアの閉まる音で断ち切られる。

「母さん！」

「しつこい！」

今度は激痛とともに視界が飛んだ。

すぐに、複数の車が急発信する音。

「か、母さん！」

立ち上がった時には、すでに車は坂を降りていた。

追いかけてようと、彼も坂を下りる。

(く……)

体が痛い。腹を思い切り蹴られたのだ。

「母さん！」

幹線道路まで降りたが、もはやどこにも母を拉致した車の姿はなかった。

いったい何が起こったというのか！

ぼうぜんと立ちつくすピーター。

そこに――

「君はなんているんだ?!」

いきなりの大声に、振り返った。

いつのまにか、自分のまわりに大勢の人々が集まってきていた。

さつきまで、サクラを見ていた隣人たちだ。

年配の男が声をかけてきた。「なんで君は連れて行かれなかったんだ!」

「え?」

ピーターは耳を疑った。

……なぜとは?

彼らはさつきまで、気さくに挨拶をしてくれた人たちだ。

それが、うって変わった疑惑の目で、自分をいつせいに見ている。

「君の星の人たちが、次々軍によって連れていかれてる。治安部の連中は止めもしない」

……君の星?

なにを言ってる? 僕の星はこの地球じゃないか!

僕は……と叫ぼうとした時、先ほどの男が再び声をあげた。

「戦争がはじまったって、本当なのか?」

「……え?」

「本当なのか?」

ピーターは、目の前の群衆が自分にむけるまなざしが、疑惑から非難へと変わってきていることを感じた。

別の者も声をあげた。

「なにか知ってるんじゃないのか! 君のおふくろは向こうのお偉さんの筋じゃないか!」

――あきらかに敵意に近かった。

今まで抑えられていた本音が、一気に自分に向かってくるのを感じた。

身の危険すら感じたその時、群衆の背後から声があがった。

「よせ! 子供に言っても何もわからん。兵站局にいる軍人どもに聞くんのだ。さつき家族と話していると、そうするようにと、ここから聞こえてきたぞ!」

声をあげた男は、自分の左腕を大きく上げ、腕時計のようなものを右手で指さした。

別の男が声をあげた。「はあ? 俺は何も聞こえなかったが」

別の女性が声をあげた。「私、息子と話してる時、なんかそんな内容が聞こえてきたわ。

雑音だと思っただけ……」

人々がわいわい言い合うなか、誰かが叫んだ。
「よくわからんが、ともかく兵站局へ行くんだ！」
その声に群衆は賛同し、いっせいにピーターの前から立ち去った。

(兵站局?)

近くには、「軍事部」の下部組織で、食糧管理を担う「兵站局」がある。
東ユーラシア区内では、最も軍人たちが集まっているところだ。

もしかや母はそこに?

いや、その前に——と、ピーターはいったん自宅へ戻ろうと振り返った。
すると、ビュンと強い風が舞った。

冷たい!

見渡すと花吹雪。先ほどまで空を埋めていたサクラが散り始め、顔にひつついてきたのだ。

それらはもはやピーターの目にはピンクではなく、灰色に見えていた。
心の中で叫んでいた。

(いったい何があったんだ! 父さん、いったい何があった! 教えてくれ!)

(三)

父さん!

あの時、本当はなにを言いたかったのか?!

「これから話すことは、覚悟して聞いてほしい。」

ちようどひと月前。自宅の地下にある父の書齋に呼ばれた時のことだった。

書齋といってもその部屋には、本だけでなく、宇宙での通信に使う機械も置かれていた。
父の顔は、見たことがないほど苦しげだった。

「地球人とピネロン人についてだ。同じ人間だが、どうしても異なる部分がある。耳の形、お前にも引き継がれたピネロンマーク。それ以外にも……」

「それ以外?」

「DNA。同じような進化をたどりながらも、わずかに異なる部分がある」

そう神妙な面持ちで語る、ピーターの父ロバート。
背が高く、肩幅が広いこと、それと太い眉と小ぶりの鼻は、ピーターへと引き継がれていた。(目や口、顔の輪郭は、母マリアからであったが。)

ロバートは、孤児として育ちながらもパイロットとしての資質を認められ、地球を代表してピネロン星に初めて降り立った。母マリアと結婚後は、おもにピネロン星への重要物資の輸送を担当していた。

そんな父が、何かを決意している。

「子供がつかれることは、理論上は証明されてたが、実際には賭けだった」

「……え？」

「リスクだった」

「え！」ピーターは驚き、自分を指さした。

ロバートはうなずく。

「僕が？……どんな！」

「最後まで聞け！」

ロバートは、異様なまでに神経質になっていた。

黙れとばかりに大声をあげたあと、ロバートはふうと深呼吸をして、静かに目を閉じた。「リスクは出産の時やってきた。拒絶反応が神経を襲い、麻酔すら利かず……。母さんは命を失うかどうかの瀬戸際で、お前を産んだ。その時得られた貴重なデータが、その後の母親たちの命を救った」

「……母さんからはそんなことは」

「話すはずないだろ」

「僕が母さんを殺すかもしれない……と？」

「違う！」ロバートは大きく首を横に振り、「母さんは自分の身をもって、二つの人類をつなぐ役目を担ったのだ。代償があるとすれば、お前にきょうだいを与えることができなかったってしまったことだ」

「……」

「その後は、二つの人類の間に生まれる子供たちの母親になる女性に対しては、地球人であれピネロン人であれ、妊娠初期に特別な薬を飲むことが義務化された。母体を守るために、胎児のDNAに操作が加えられるようになったのだ」

「……僕以外の？」

ロバートはうなずき、「だが、お前のDNAは操作されていない。お前の体には、母さんの命がけの刻印が押されている。それを私は……私たちは……利用するかもしれない」

そう言うと声をつまらせ、顔を伏せた。

「父さん？」

ロバートは苦しげに何度も首を横に振り、「いや……それはあつてはならないことだ！あつてはならない……しかし……しかし私に何かあれば、お前には二つの人類のために動いてもらわないといけない。心しておいてほしい」

「……父さん？」

「まずは母さんを守れ！そして、なにかあった時は私のこの書齋に、ひとりで入れ！絶対に他人を入れるな、母さんもダメだ、ひとりで入れ！その時には、鍵がなくてもお前だけに入れるようになってる。そして……」

そして……なにがあるうとも覚えておいてほしい。お前は、私と母さんが本当に愛し合っただけの子供だということを。だからこそ、母さんは命をかけてお前を生んだのだということを」

「父さん！……どうい……？」

しかしロバートは、それっきり沈黙してしまった。

ピーターは、さっそくロバートから言われたとおりに書斎に行こうとしたが、自宅に入るやいなや、緊急ブザーが鳴りはじめた。急いで居間へ向かうと、パソコンに勝手に電源が入っており、映像が部屋一面に映し出されていた。

かつて——〈逸失の日〉の前までは、個人が文字や音声を自由に発せられる機器や手段がさまざまにあったと聞く。しかし今は、腕時計型送受信機能付きの身分証明装置「ID時計」を使つての対一の音声や映像のやりとりしか、個人には許されていなかった。このID時計は、地球人のみならず、地球に住むピネロン人にも原則装着が義務づけられていた。

また、一般家庭の一世帯に一台以上、パソコンを置くことも義務づけられていた。

家庭に置かれたパソコンは、かつてテレビと呼ばれていた機器と同じように情報を受信することができ、一対一でならID時計同様な音声や映像のやりとりも可能であったが、ID時計同様国による盗聴は常に可能であった。

——つまり、地球に住む者は、地球人・ピネロン人かわらず、常に国によって監視され管理されていることを意味する。

だからこそ緊急時には、いつせいに全てのパソコンが動く。人の気配が感知されるや自動的に電源が入り、ブザーが鳴り、映像が拡大投射されるのだ。

それが今起こっていた。

しかし、映し出されるのは英語の文字のみ。あとは音声が続り返し流されるだけ。

ピネロン星との間で戦争が始まるかもしれないこと、詳細発表までは原則自宅待機しているとのこと。——伝えられたのはそれだけである。

(そうだったのか……)

ピーターは、先ほどの隣人たちの行動の意味を理解した。

国からの説明があいまいななかで、得体のしれない軍の動きがあるのだ。おそらくほどの政府機関も、この不明確な発表以外のことはなにも説明できないのだろう。これでは国民が不安になりパニックを引き起すのも無理はないと。

さらに先ほどの隣人たちの反応からみると、どうやら一部のID時計が、何者かのしわざで謎のノイズを受信しているらしい。

(いったい何が起きているのか……)

ピーターは考えようとしたが、やめた。今はそれどころではない。

この間にも、パソコンは同じ映像を何度も繰り返し流し続けていた。

もういいとばかりに電源を切った。すると、今度はあたりの惨状があらわになった。マリアはここにいたらしい。床には粉々に割れたコーヒークップ、さらにはコーヒールシキ液体が流れていた。

テーブルクロスもぐちゃぐちゃになり、皿や花瓶も粉々に、生けてあった花も床に散乱していた。

(ひどい!)

まさかと思い、隣にある彼女の個室に行ってみると、机の上や引き出しが荒らされ、口

バートとの通信に使っていたパソコンが消えてしまっていた。地球に来てからは女優をやめ、十代の頃より学び続けていたピアノを教えたり、翻訳の仕事をしたりしていた母。その証拠を引き出すかのような所業。

(連中はいったい何を……)

誰か、この異常事態についてなにか知ってはいないのか。

ハッと、ピーターは思い出した。

(さっき母さんを連れて行った軍人、レザーに似てるんだ！)

目が、自分の親友にそっくりなのだ。

彼は一週間ほど前から、学校には来ていない。

急いでピーターは、腕をまくり、ID時計を押してみた。

返ってきたのはプープーという音。

(さっき倒された時、壊れたんだだろうか?)

今度は、再びパソコンの電源を入れ、そこからの通信を試みる。

しかし、やはり通じない。

レザーへの連絡をあきらめ、ピーターは地下に行き、父の書斎の前に立った。

やはり、母の部屋同様、軍人たちが開けようとした痕跡がある。

ピーターはドアに手をかけた。

(あ……)

ロバートが言ったように、すぐに開いた。

入るといきなり、床の真ん中に置かれた灰色のトランクが目に入った。以前にはなかったものだ。

さらに、いきなり――

「ピーター！」

ロバートの声。

目の前に父の姿が。

「父さん！」

なんだ生きてたんだ！

帰ってたのか！

しかし次の瞬間、ぎよつとして立ち止まった。

目の前にあったのは、ロバートの映像だった。

(四)

「お前がこれを見てるといふことは、私はこの世にいないといふことだな」

「父さん！」

映像だもわかってても、感情は抑えられない。「父さん、これはいったい……」

「お前は混乱してるだろう。だが映像の私はそれに応えることにはできない。まずは母さ

んの安全を守れ。それがまだなら、いったんここを出ていけ。戻ってきたらまた再開するようにセットしてある」

「……ああ」

ピーターはへなへなと座り込む。

(ごめん、母さんは連れていかれた。僕は守りきれなかったんだ……)

頭を抱えこんで、床に伏してしまった。

数分の沈黙。

やがて、「では続ける」と、音声が開いた。

「これから言うことは、しっかりと覚えておけ。そしてこれからはお前の判断で動くのだ」
ピーターは顔を上げた。

「今回の私の任務内容は、地球とピネロン星の政府間で正式に決まったことではあるが、公式に告知はされていない。なぜなら私が今回ピネロン星にもっていくことになったのは、未使用の原爆、つまり原子爆弾なのだ」

「原子爆弾……」ピーターは息を飲んだ。

「そう、お前も知っているように原爆や原子力エネルギーは、地球においては長く封印されてきた危険なものだ。廃棄物の扱いにも苦慮している。火星や木星への廃棄は未知数のリスクがある。とりあえず地球で、特に危険なところだけはエキゾチック・マターでおおわせているものの、一時的な封印にしかならないことは今は誰しもが知ってる。

これ以上地球に、異物であるエキゾチック・マターを入れるわけにはいかない。そこでピネロン星で処理してもらうことになった。まずは未使用の原爆から。そもそもエキゾチック・マターはピネロン星固有のものだから、ピネロン星で処理することには問題は起きないだろうとの希望的観測でだ。

リスクを負うことになったピネロン星だが、一部の勢力にとつては見返りは大きいようだ。具体的にはわからんが、どちらの国も一部の政府関係者にとつての利権になっている。リース財閥もからんでる。最近ピネロン星でのプロジェクトから次々撤退させられているが、どうもあらたな利権獲得をめぐってこの話に乗ったようだ。

そんなわけだから当然この計画には、反対する者が多かった。特に向こうの科学者の間には反対意見が多かった。だが押し切られた。お前の叔父のアブラハムは特に強く反対してたのだが……無理だった。いくら天才とうたわれても、若いということだけでアブラハムには発言力はないのだ」

アブラハムは、母マリアの年の離れた異母弟で、ピネロンを代表する若手科学者のひとり。機械工学が専門で、ひんぱんに地球にも来ており、ピーターとは兄弟ほどしか歳が離れていないこともあって、懇意だった。

「危険なのは原爆だけではない。ピネロン星と地球、どちらの社会もだ。ピネロン星では、現在の政府内で起きてる分裂が、この原爆処理をめぐって特に激しいものになってきている。地球も国内が不穏だ。どちらもいつ大規模なテロ、いや戦争が起こってもおかしくない。

そんななかで、一部の科学者たちが極秘で進めてきていたプロジェクトが悪用される危険が出てきた。地球とピネロン星との間にある複数のワームホールと、木星と火星との間

にあるローカル・ワームホールを、最終的にはすべて、半永久的に固定化させるといいうものだ。

ワームホールは永久的なものではない。いつふさがってもおかしくない。特にローカル・ワームホールは不安定すぎて……。今回原爆をピネロン星にもっていくことになったのも、宇宙で爆発させるとそれになんらかの影響が出るのではないかとの推測があつたのだ。しかし……。だからと言って、自分たちより放射線に敏感な人間の住む地に送るなど、倫理的に正しいはずがない。しかし、だからといって私は任務を断れる立場にはないのだ、たとえ反対勢力から狙われようとも……」

感情的になりはじめたところでロバートはいったん話を止め、大きく深呼吸をした。そして続ける。

「時間がない！話を戻そう。ワームホールの固定化は、相当に難しいことらしい。だから当面のつなぎとして、ワームホールが使えなくなった時のために、一時的にワームホールを造れる技術が開発されてきた。で、なんとかひとり分だけなら使える技術——一本の槍で空間を貫く技術——「孤槍システム」はできあがった。最終的には、ラフラスという科学者夫妻とその息子夫婦、それにアブラハムが完成させた。

ただ、開発途中から皮肉なことが起きていた。専用のスーツや専用機、また、緊急事態が発生した時に遠隔操作できるようつくられた切断機や爆弾などに、おのずと最新の兵器的性能の粋が集められていったのだ。かつて地球において、原子力エネルギーの開発が原爆という兵器に集約されていったように。

そういう兵器としてのおいに気づいた者たちがいたのか、プロジェクト関係者は開発途中から次々姿を消していった。拘束されたとも暗殺されたとも言われている。なので最後まで残ったラフラス一家は、システムの完成を極秘にした。その完成したシステムも、アブラハムによつて特定の人間にしか使えないものに改良された。もともとは誰にでも扱えるようにしていたものを、ひそかにピーター、お前の脳波でしか動かせないものへと設定し直し、お前の特殊なDNA配列をパスワードにしたんだ。

すでにお前の額の中には、DNAを読み取るためのセンサーが埋め込まれてある。昨年アブラハムが来た時に、お前が寝ているときにひそかに埋め込むことを、私が許可したのだ」

(え……?)

仰天した。

額に手を当てたが、それらしい感覚はない。しかし、たしかにその時期、朝起きた時、額に鈍痛がして、なにかおかしい気分になったことがあつたことを思いだした。

そんなに前から、叔父はずっと身の危険を感じていたのか……。

「ラフラス夫妻はアブラハムより前に消えた。アブラハムは身を隠す前に私に託した。私は……。何も知らぬ顔して過ごすことしかできなかった。彼らのように身を隠すと、お前たちが、たとえ何も知らなくても危険にさらされるかもしれないからだ。

だが、さすがに今回の任務中には、私の身に何か起こるかもしれないと感じてる。持つていく原爆は、外からの刺激ですぐに反応が起きるかもしれない、一番危ない状態のものだからだ。そして何か起こるとすれば、それは今回の原爆輸送任務が原因かもしれないし、「孤槍システム」の完成を知っていることが原因かもしれない。ともかく私はあらゆるこ

とに深くかわりすぎたのだ。だから今お前と話しているということは、実際の私がお前とおり消されたということだ」

「と、父さん！」思わずピーターは叫んだ。

「だからだ！あとはお前に託す。重荷をお前に引きわたす父を許してほしい！だが私も確信しているのだ。二つの人類を守るためには、どうしてもこの「孤槍システム」の技術を捨て去ることはできないのだということだ！」

この件について知っているのは、私を除けば六人だ。アブラハム、ラフラス夫妻とその息子夫婦、それに地球側にひとりいる。ただこの男は、口は堅いがどこか野心があるようで心配だ。信用できるかどうかはお前が彼に会ったときに判断してほしい。……あとはトランクをあけたらわかる。直接お前の頭のなかに説明が流れ込むはずだ」

ピーターはトランクに手を取った。

「お前の脳波でならどこにあらうと探し出せる。中身はお前にしか見れない。中に通信機も入れておいた。重要施設での極秘通信もある程度は傍受できる。前もっているいろいろなところにアンテナをバラまいておいた。あとは開けばわかる。

お前の脳波でできること——空間を制御できる力、自らを守る力、攻撃する力。それらはすべてトランクの中に入れ込んである。技術の保管が第一だが、それは二つの人類が生き延びてこそだ。危機が生じればその力を平和のために使え！ただし……トランクはよほどのことがない限り壊れないようにつくられてるが、それでももし壊れることがあれば、あるいはお前が死ぬようなことがあれば……すべては自動的に消滅する……技術は消え去る……」

「！」

ピーターはぎよつとじつと、ぐつとトランクを開いた。

(え?……ああ!)

謎めいた光が放たれた。

(五)

数時間後——

東ユーラシア区軍事部兵站局本部にて。

広い敷地の中には、大きな倉庫がいくつも立ち並んでいた。

あたりはすっかり闇となり、パラパラ雨が降りそそいでいた。

風も強い。いつかは大降りになる予感がする天候だ。

にもかかわらず大勢の群衆が、本部の正面門の前に押し寄せてきていた。

「アクセスの良さがリスクだったとは……」

チツと舌打ちしたのは、マリアを拘束したあの少尉。

門の中、群衆からそれほど離れていない場所に、彼と彼の部下の兵士たちが銃を持って待機していた。

予期せぬ事態に兵士たちはうろたえていた。

「キニスキー少尉、道路は封鎖してあります。鉄道は止めましたが、何本の列車は発車してし

まったあとで……」

「もういい！へ々に緊急停車させて事故でも起こされるとなおマズい。ほおっておくしかない」

キニスキーと呼ばれた男は、鋭い視線で民衆を見わたしつつ、

「まだ増えるか……自宅待機せよと命令してるのにこいつら……」

「強制力はありませんし、それにあんな不完全な通知では、パニックに陥るのもやむをえないと……」

「同情はできない！われわれは地球のために国の命令に従う。彼らも国の命令に従うが筋だ！」

しかし群衆は騒ぎ始める。

——何が起こったんだ、説明しろ！

——すでに戦争は始まっているというじゃないか！どうなってるんだ！

——どこもなんの情報も出してくれない！大統領の声明もない！なのに軍だけが動いてる！なんなんだ！

——われわれの回りにはまだピネロン人がいるんだ。いつか彼らに攻撃されるのか？！

——ピネロン星には娘がいるんだ！どうなるんだ！

——軍はわれわれを本当に守ってくれるのか？！

キニスキーはチツと舌打ちし、

「よけいな情報を流してる輩がいる。ここに来るよう煽ってる輩がいる。何が狙いだ？混乱を起こすことか？……いや、まさかわれわれがここに来ていることを知って……？」

憎々しげに顔をゆがめ、「おそろくは、旧型の通信機器をもってる奴らだ。回収を徹底的に行わなかった行政部の怠慢だ！」

そして、通信している部下に向かって、

「総司令からまだ連絡はないか！」

「大統領を説得しきれてないようです」

「く……粘りやがって！あの女のおかげで戒厳令が出せない。それがこのありさまなのだ！」

キニスキーはぐつと歯を食いしばり、

「ピネロン星でのような野蛮なクーデターは、われわれの総司令は行わない。それをいいことにあの女め！」と唸るように声をあげ、

「ピネロンに和平などもちかけてもムダだ！治安部のはぐれどもを使ってわれわれを封じようとしてもムダだ！その間にも宇宙にいる同胞は死んでいつてるのだ！」

キニスキーは、我慢は限界とばかりに、群衆の前に踊り出た。

「戦争のことは軍にまかせろ！自宅退避との命令だぞ」

しかし群衆は、彼の言うことなど聞かない。

——そんな命令、大統領からの命令ではないぞ！

——軍事部のお偉方を出せ！親玉を出せ！リモートでいいから呼び出せ！

——お前では話にならない！

群衆は絶叫し、本部内に押し寄せようとしていた。

次の瞬間、キニスキーがさっと手を挙げた。

すぐに、煙幕のようなものが放たれた。催涙弾であった。

門の外では絶叫が。

絶叫はしばらくたつてもやまなかった。どうやら後続の列車が到着したらしく、そこから出てくる人々が、逃げまどう群衆と衝突しているらしかった。

確実にケガ人が出ている。このままでは死者すらも。キニスキーは顔をゆがめた。

そんな中でも、一部の群衆はかえって勢いを増している。

キニスキーは決意した。

「やむをえん！実弾を使え！」

「え？」

「スパイのしわざかもしれない」

「……ま、まさか！」

「スパイが紛れ込んでるかもしれない。市民を扇動してるかもしれないのだ！」

「少尉、しかし……」

「ナメられてはダメだ！なんとしても連中を鎮めなくては、この事態を敵に利用されかねない！」

そんな時——

「ま、待ってください！」

あきらかにキニスキーの部下たちとは異なる様式の軍服を着た兵士が、背後から飛んできた。「越権行為です。ここで勝手にそんなことをされては……」

しかしキニスキーは大きく手を振り、大声を張りあげる。

「兵站局の兵士はうしろで待機している！ここはわれわれピッツ総司令直属の親衛隊が仕切る！」

次いで、自分の部下たちに対し、

「いいか、責任はすべて私がとる！敵はこのようすを見ているかもしれない。弱腰とみられてはマズイ！徹底抗戦をアピールする。あいつを撃て！」

そう言って、人々の先頭に立ってなおも鼓舞する中年の男を指さした。

「転覆罪、反乱罪だ！前を狙え！」

兵士たちはいつせいに、銃を構える。

銃口はそろった。

そこに——

「うわっ！」

キニスキーは倒れ込んだ。

手を何かがかすった。

後ろからなにかが襲ったのだ。

振り向くと、建物の上に何者かの影が。

「何者だ！」

稲光のなか、何者かが、建物の上に立っていた。
長い髪、マント、体にびっちりとしたスーツ。

「何者だ！」

答えない。何も言わずに立っている。

「かまわん、撃て！」

しかしその者は、すっと影の中に隠れた。

(丸腰の市民に銃を向けるなんて……)

キニスキーをにらみつけるその人物の化身は、ピーター。

ベルトのバックルに手を当て、上をこすると、楕円形の光の塊がスツと手のなかにおさまった。

(まわりがよく見える。体も軽い……)

群衆のなかには、見覚えのある顔も見つけていた。自分を責めていた隣人たちだ。彼らはみな、あつけにとられたように、自分の方を見上げている。

その時、再び稲光が当たった。

「何者だ！撃て！撃て！」

自分の姿が映し出されたとたん、四方八方から銃の弾が飛んできた。

(くそ……)

楕円形の光を投げつける。

兵士たちがひるんだ。

さらに投げつける。

(これは……)

次々と、兵士たちの銃を叩き落すことができたのだ。

(すごい……これはすごい！)

得意げになり、感情が高まっていった。

同時に怒りも高まっていく。

(あいつが……母さんを……)

眼下にいたのはキニスキー。

かたまった状態で、ただ自分を見つめていた。

自分のなかの、別の誰かが叫んだ。……あいつを倒すんだ！

彼に狙いを定めた、その時――

近くから、声が放たれた。

「そこまでだ！退け！」

何者？！

「もうここにはいない！殺すな！退け！」

聞いたこともない声だった。

誰がここにいないと？……母さんがか！

困惑でいったん足が止まり、煽られるように後ろに身を引いた。同時に、救急車のサイレン音が。群集も引いていくのが見えた。

(六)

得体のしれないものを危険と位置づけ、そこから身を守ろうとする本能が、群集をその場から引かせた。

鳴り響く救急車のけたたましいサイレンによって興奮は覚め、自制心を取り戻したのか、雨が本降りとなったためか、大衆はちりじりになって兵站局から去って行った。自分たちが見たものが何なのか、わからないままに……。

日は変わっていた。

雷はまだゴロゴロ鳴り、雨の音は響いていた。

しかしそれ以外では、何事もなかったかのように、兵站局は静けさをとり戻していた。「けが人多数ですが、重体者や死者は出ていないもようです」

厳しい顔つきで立っていたキニスキーは、部下の報告を受け、目を閉じホッと安堵のため息をついた。

キニスキーは、部下たちとともに建物の中に入っていた。

「少尉、あ、あれは何者だったんです？」

「わからん。われわれは、このことをそのまま報告するまでだ」

「またよけいな情報を流す輩が出るのでは？」

「情報管理の強化の必要を願い出るまでだ。それでも流してくるなら、見つけ出して今度こそ撃つ！」

再び顔を厳しくゆがめるキニスキー。

部下のひとりが心配そうにささやく。

「失礼ながら少尉、最近ご家族になにか？」

キニスキーは一瞬ハッとするが、

「大丈夫だ。君たちが心配しなくとも……。それよりも休め。奴はまだ起きないだろう」

「少尉は？」

「報告をあげてからだ」

そう言って腕をまくり、ID時計を出したところで――

「何をしてる！」

いきなり、初老の太った軍人が乱入してきた。

キニスキーはぼそつとつぶやく。「起きてきたか」

上官らしいその軍人は、寝起きなのか、軍服はだらしなく乱れていた。

「何の音だ。銃声か？……お前たちは何者！どこの所属だ！」

そう叫んでキニスキーを指さすが、キニスキーはうしろを振り返ることなく表情を変え

ることなく、ID時計をポンポン操作しながら答える。

「ディミトリ・キンスキー。階級は少尉。所属は軍事部総司令官ビツ直属の親衛隊の……」

「親衛隊だと！親衛隊がなんでこんなところに……？わしは兵站局局長の……」

「存じております。まもなく明け方です。何時間お眠りで？職務放棄も報告いたします」
「な！」

「私はピネロン人逮捕も兼ね、あなたが軍の大切な食糧を横流ししていたとの内部告発にもとづき調査に参りました。で、その証拠を先ほどつかませていただきました」

ID時計を操作しながら、淡々と抑揚のない声で、キンスキーは答える。

「な、なにを」と局長がまわりをきよろきよろすると、いつのまにか自分を捕まえんとばかりに何人かの兵士たちが待機していた。「わ、わしがなにを……」

キンスキーは、後ろ向きのまま淡々と、

「戦時に備えての非常資金を蓄えたのでしたならご自分の分だけでなく、部下たちの分も、いや宇宙で死んでいった兵士たちの家族の分も考えるべきでした。異論がありましたら軍事裁判にて」

局長は驚いて、自分のID時計を操作しようとするが、

「治安部に連絡してもムダです。軍事部に統合されました。追つての沙汰をお待ちください」

「待て！お前、どういうことだ！お前……もしやわしに薬を……？わしは眠らされたのか？……おい！前を向け！いいかげん前を向け！わしに背を向けたままか、顔を見せろ、おい！」

抵抗むなしく、局長はそのまま引き立てられていった。

キンスキーは、そんな状況を見ようとせせず、ID時計を操作し続けていたが、

「え？」

一瞬間が歪んだ。

「ここには今日、われわれ以外の者も来てたか？」

と、局長が引き立てられていくのを怯えながら見ていた彼の部下に問う。

「あ……あ……捕虜の輸送の前に、車両点検として立ち寄られた中尉殿と……えーと、所属は」

「もういい、わかった！」

キンスキーはID時計を見ながら、

「こちらに届いてる報告どおりか。問題はない。問題はないが……」
不機嫌そうな顔をしつつも、

「まあいい。ようやく正式な臨時指揮権がおりた。次期局長が来るまで私がここを仕切る。まだ不審人物がひそんでいるかもしれない。兵站局の兵士たちと協力して、警戒を怠るな！」

自分の部下たちにそう言って、なにかを振り払うように歩き始めた。

「非国民……異国民ともども駆逐するのみだ……」

そうぶつぶつぶやきながら。

外では雨はやんでいた――

ピーターはよろよろと、まだ闇のなかにある街を歩いていった。混乱と困惑と、疲労の極致にあった。

すべてが夢物語のよう。それでも、自分がなにをしたのかははっきりと覚えている。

あの時、兵站局での混乱を、トランクから聞いたのだ。

なぜ、どうやって、その通信をひろえたのかはわからない。

ただそこから、キンスキーの声が聞こえてきたのだ。

それでカツとなった。

同時に、母をとり戻せるのではないかとの衝動で、トランクの中にあつた専用スーツを着込んでしまった。

着込むと、すべての機器の動かし方や制御方法が、いっきに頭のなかに入ってきた。

あとはすべて、まるで本能のままに。

――たしかに、あのままでは殺していたかもしれない。

あの謎の声で目が覚めたのだ。

自分に備わった力に、おそろしさと戸惑いを感じつつ、それ以上に奇妙な快感を感じていた。

はじける感情に心がついていけない、カオスな興奮状態にあつた。

夜が開けようとしていることにも気づかず、意識が飛んだ状態で歩いていたが――

ふと、近づいてくる音に気づいた。

いきなり現実に戻された。何の音なのか？

より足を速めると、音は轟音と化し、地面はガンガン揺れ、空気は匂い、あたりにはピョクの花吹雪が舞っている。

「あ！」

ピーターは目を疑った。

サクラ並木が切り倒されていつているのだ！

まだ花が残っている木々が、裁断機をつけたトラックによって切り倒され、次々と道路になぎ倒されていつている！

「何をしてるんだ！」

思わずピーターは、トラックの前に飛び出した。

トラックは止まった。

中から顔を出したのは軍人だ。驚いて叫ぶ。

「何してる、朝早くから！さつき戒厳令が出たことを知らんのか。さっさと家に帰れ！」

「何を……」

「道路拡張だ！危ないから道の真ん中を歩け！」

――なんとということだ。

ぼうぜんとするピーターの前で切り倒されていくサクラ。
そんな時――

ふと、自分の家のある丘から、赤い光が放たれているのが見えた。
聞こえてくるのは、裁断機の音とは異なる、サイレンの音。

まさか……。

駆けていくと、サイレンの音はどんどん大きくなっていく。

そして……炎だ！丘から炎が上がっているのだ。

ピーターは駆けた。

幹線道路から右に曲がると、私有地ということからか、サクラ並木はまだ切られていなかった。
ピーターは駆け上がった。

「ああっ！」

着くと、一面火の海。

自宅が燃えている！

サクラの木々にも、どんどん火がまわっている！

自分とマリアが植えた木々が、自分と母との絆が、破壊されていつている！

そして、自宅にあった父の形見も……。

「危ない！」

火の中に飛び込もうとしたピーターを、到着したばかりの消防員たちが止めた。

ピーターは必死に抵抗するが、ふたりがかりで締めあげられ、動きがとれない。

「母さん！父さん！ああ……！」

やがて消防車から、緊急映像が飛び出してきた。

青いヒジャブで頭を覆った、太めの眉の、四十歳ほどの大柄でふくよかな女性が画面にあらわれた。

「すべての地球人に告ぐ。私は地球国大統領のマリヤム・アデル。ピネロン星との間で戦争が起きました。しばらくは戒厳令にしたがい……。」

あとの言葉は、もはやピーターの耳には入らなかった。

わかったのは、今までの平和が崩壊してしまったこと。

先行きのわからない、おそろしい時代に入ってしまったことだった。